

聖書：マタイ 5：4

説教題：悲しむ者は幸い

日時：2017年2月19日（朝拝）

前回から山上の説教に入りました。まず語られているのは「真の幸い」についてです。ここを読む時に感じるのは、ここにある教えは私たちが普段考えている価値観と何と異なるかということでしょう。私たちは誰しもが幸せを求めて生きています。こっちに幸せがあると聞けば、そっちに飛んで行きたくなりますし、あっちに別の幸せがあると聞けば、あっちにも飛んで行きたくなります。しかしそれは本当の幸いな道なのかということはこの御言葉を通して考えさせられます。

4節にこうあります。「悲しむ者は幸いです。」 これまた私たちが驚くような言葉です。聞いた瞬間、言葉が矛盾しているように感じます。ある人が悲しんでいるとしたら、それはその人が自分は不幸だと感じているからではないのか。その不幸だと感じている人が幸いであるとは一体どういうことなのか、と私たちの頭は混乱します。この世の多くの人は悲しみにはいいことがないように考えています。できる限り早く悲しみの状態から脱出することが幸せであると考えます。そうして人々がこの悲しみを自分から遠ざける一つの方法は、より楽しいこと、より快楽を覚えることを行なって悲しみを相殺するということでしょう。たとえばお酒を飲んで悲しいことは忘れ、楽しい気分になる。あるいはやけ食いをする。美味しい物をたくさん食べて、いやな気分を吹き飛ばす。あるいは衝動買いをする。かねてから欲しかったものを買って自分の心を喜びで満たし、悲しみを締め出す。あるいは悲しみに心が支配されないために人々がする別の方法はプラス思考をするというものでしょう。時々、私は物事をポジティブに考えるようにしています！と語る人がいます。確かに暗いことが多い毎日の中で、人々がこのような考え方を好むことは分かります。物事を否定的な側面からばかり考えやすい私たちにとって、肯定的な面からも考えて見ることは意味のあることでしょう。そうすれば別の世界が見えて来ることもあるでしょう。しかしそれが単に悲しい面を見つめると気分が落ち込むから、それは見ないようにする、物事の明るい面だけを見るということだったらどうでしょうか。それは現実を直視していないことではないでしょうか。本当に良く見るべきことをごまかし、自分をだましていないことにならないでしょうか。何度かテレビで見たことがあります、この暗いご時勢の中で、笑うことが健康の秘訣だと言って、笑うこ

とを促進奨励する会のことが紹介されていました。笑うことは体調に良い効果をもたらすそうです。だからみんなでワッハッハと笑って、この世の暗さを吹き飛ばし、健康になろう！と言うのです。テレビに出ていたグループは、ちょっとしたことでみんなで全身を使って大笑いしていました。その姿を見ていると確かに気分は明るくなり、嫌なことはどこかに吹っ飛んで行きそうにも思えます。しかし思い起こされるのはルカの福音書6章25節のイエス様の御言葉です。「いま笑うあなたがたは哀れです。やがて悲しみ泣くようになるから。」 軽薄な表面だけの笑いは、神の祝福とは程遠いものです。それはやがて悲慘に至る。そういう仕方ではうまく行かない。むしろそのようにして悲しみを遠ざけることは、真の幸いを捨てることです。イエス様は「悲しむ者は幸いです」と言われているのですから、私たちはここにある幸いを大事なこととしなければなりません。

ではこれはどういうことなのでしょう。まず私たちが押さえておくべきは、これはすべての悲しみに当てはまる言葉ではないということです。たとえば犯罪を行なって警察に捕まって悲しい思いをしている人が幸いだと言っているわけではありません。あるいは突然病気にかかっていたことが判明して悲しい気持ちになった人が即、それで幸いだと言っているわけではありません。私たちはどんな言葉も前後の文章の流れの中で読み、理解する必要があります。前の章の17節にはイエス様の公の宣教における第一声が記されました。それは「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」でした。天の御国が近づいたから「喜びなさい」と言ったものではありません。まずイエス様が求めたのは「悔い改めなさい」でした。それに続いてこの山上の説教が語られています。ですからここで言う悲しみとは、自分の罪を悲しむこととの関係で考えられなければなりません。またこう言ってもいいと思います。「悔い改めなさい」という第一声に続いて、イエス様が山上の説教で語られた最初の言葉は、前回見た「心の貧しい者は幸いです」という言葉でした。心の貧しい者とは、自分が神の前に霊的破綻者であること、自分で自分を救えないどうしようもない者であることを認めて、神にのみ望みを置く者ということでした。しかし私たちは自分がそういう者であることを認め、知っていれば良いのではない。それを「悲しむ」者でもなければならぬ。ただそれを知るだけでなく、心からそのことに悲しみを覚える。そういう意味で今日の4節は前の3節に引き続く当然の状態とも言えます。

私たちは人生の中で様々な苦しみを経験します。そしてその苦しみの中で悲しみます。しかしたくさん苦しみを経験してただ悲しんでいる人が幸いと言っているのではありません。そうではなく、その苦しみの背後にあるものを見て悲しむことが大事なことです。なぜ様々な苦しみが私たちの生活にはあるのでしょうか。その根源にあるものは、私たちが罪によって神から離れているという事実でしょう。この世界は本来良いものとして造られました。創世記には、造られた最初の世界は「非常に良かった」と記されています。そんなこの世界に苦しみが入って来たのは人間の罪ゆえでした。そのことを思っただけで悲しむのです。

まず自分自身の罪という問題があります。私たちがこの世で経験する多くの苦しみには、私自身の罪が関係している場合が多くあるのではないのでしょうか。誰かとの人間関係を壊した時、相手にも問題があるかもしれませんが、私にも問題がある。相手の言葉を悪く取ったり、過剰に反応したり、相手へのねたみ・争い・敵対心から行動したり・・・。そして自分の生活を振り返ってみると、そのような罪をあらゆる人間関係において巻き散らしている自分であることが見えて来るのではないのでしょうか。そのために多くの苦しみを自分の生活にもたらしているのではないのでしょうか。あるいは私の罪が直接関係しているわけではない苦しみもあるでしょう。突然病気になったり、突然何らかの災難に会ったり、愛する家族に不幸が生じたり・・・。それでもなぜそういうことが世にあるかと言えば、私を含めたこの世の全人類が、罪のために神と正しい関係にないからなのではないのでしょうか。

また私たちは自分自身の罪を悲しむと同時に、周りの人々や世界を見て悲しむ者でなくてはなりません。イエス様はラザロの墓の前に来た時、涙を流されました。またエルサレムに入る時、ご自身に逆らい、神に反抗している都のために泣いたと記されています。パウロもピリピ3章18節で「今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」と言いました。詩篇の作者も「私の目から涙が川のように流れます。彼らがあなたのみおしえを守らないからです。」と言っています。私たちはこの世の様々な問題を見て、ただ分析・断罪するだけであってはなりません。その背後に人間の罪という大きな問題があることを見て嘆き悲しむべきなのです。そういうことがここで言う「悲しむ」ということなのです。

ではなぜこのような人が幸いなのでしょう。その理由が4節後半に記されています。「その人たちは慰められるから」。ここに「慰められる」と受身形で書かれていますが誰が慰めてくださるのでしょうか。それは神様でしょう。ここに素晴らしいグッドニュースがあります。もしこの世界にただお一人の神が、慰めてくださる神でなかったなら、私たちに救いはありませんでした。自分の罪のために苦しみ悲しんでいるのは、自業自得であって、わたしには何の関係もないと言われてしまえば、それで終わりです。しかし聖書に啓示されている唯一の聖なる神は、自分の貧しさを認めて嘆き悲しむ者たちを慰めてくださる神です。それは旧約聖書からそのように啓示されて来ました。イザヤ書40章1節には「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を』とあなたがたは神は仰せられる」という御言葉があります。聖なる神は「慰めよ、慰めよ」と慰めに心を傾けてくださる神であると言われています。またイザヤ書61章1～3節：「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。」1節には「貧しい者に良い知らせを」とマタイ5章3節と関係する「貧しい者たちへの福音」が語られていますが、2節以降には悲しむ者たちを慰めてくださることが言われています。これは神が将来遣わすメシヤによってもたらされる祝福を述べている言葉です。すなわち神はメシヤであるイエス・キリストによって、悲しむ者たちを慰めてくださる。本来私たちがいくら自分の罪を認め、悲しんでも、それだけでは神が私たちに慰め、祝福することはできません。しかし神はメシヤを通して、すなわちやがて私たちの代わりに十字架につき、罪の代価を払ってくださるイエス・キリストを通して、悲しむ者たちを慰め、救ってくださるのです。

私たちは確かに自分の罪に悲しんだ時、イエス・キリストと出会うように導かれました。「あなたの罪は赦されました」というキリストの宣言を聞きました。救いようがないと思われた自分の罪が、何と神の御前に全部赦された！とてつもなく深い慰めです。これで神との正しい関係に歩むことができる。そしてこの慰めは信じた最初の時ばかりのものではありません。私たちは信仰生活を送る中で日々罪を犯します。そのたびに神との関係は曇ります。しかし悲しむ者は繰り返しイエス・キリストのところに来ます。そして自分の罪を告白することを通して、なお罪を赦され、新しく聖められ、繰り返し

慰められるのです。

そしてこの神の慰めはやがての最後の日に完全に実現します。私たちはその日、ついに神が私たちにご計画くださった最終的な栄光の状態へと導かれます。イエス・キリストの完全な似姿へと導かれます。そして私たちばかりでなく、この世界全体も変えられます。ヨハネの黙示録 21 章 1～4 節：「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」ここに神が私たちの目の涙をすっかり拭い取って下さるとあります。私たちはこの地上ではなお涙する毎日の連続に置かれていますが、かの日には神が私たちの目の涙を拭い取って慰めて下さるのです。もうその世界には悲しくて泣くようなことは何もないからです。そして私たちは神の御顔を直接仰ぎ見、その栄光の中で太陽の光もいらず、夜がない永遠の交わりの中を歩みます。こういう究極の将来が私たちには約束されています。そのことを喜び見つめて私たちは今ここで慰められますし、またやがての日にはこの祝福に実際にあずかる究極の慰めに生きることができるのです。

私たちはこの幸いを知っているでしょうか。私たちは悲しみの状態にあるよりは喜びの状態にいたいと思う者です。嘆いているよりは笑っている状態にいたいと思います。しかしそのあまり、この「悲しむこと」を軽んじて、ここにある祝福を投げ捨てることはありませんように。イエス様は言われました。「悲しむ者は幸いです」と。私たちはこの言葉に聞き入り、神が幸いと言われるこの祝福に歩みたいと思います。神が用意くださった豊かな慰めに今ここで生かされ、かつその究極の祝福を待ち望む慰めに日々生かされて行きたいのです。